

安政見聞録

3

下

安政見聞録巻之下

○夜を捐て良人の死骸を拾ふ條

そも人として信実を旨とせよ。縦才藝萬能に達すとも信の心なき者ハ人にして人にあらず。箇斗りの事ハ誰もよく知りぬる事ながら己の勝手よきまゝにハ実を竭して常人に超るでもある人も勝手よろしくねてれ知り。日来ハ似もありけく者あり。近くハ己富貴なる事を先る者ハ多く実あり。一時その權を失ひ落魄なるに及びてハ親きも疎くなり。死てもその懇ひなる者も更に路人の思ひをなす事ハ世に珍しとすべからず。然るに獣その好ミとする事ハ貧富窮達に拘らざるこそ信実なる人といふべし。父子兄弟ハ猶く措く。夫婦ハ元他人なり。されども離れ夫婦となりてハ互に信実を以てなれてを。今さらいふに及ばねどもその中

は実あり不実あり。縁く生を得る所によるといへど。多くハ道といふ人
ことを知らざれバ。父母の教へなきハより心恣になりても夫となりて奴僕
のごとく。尚ひる子す婦人あり。されども夫たる者是に溺れて。その不遜
无礼を責ず。日往月来して年を累ぬ。つひハ常のごとくなりて已も
无礼なるを忘れず。夫もまた彼が気性。今まさに改むべからずと悟り頽
はるゝもの多く。老中人以上のものハあるべからず。中人以下の夫婦にあるを十
に七八ハこの数ひあり。然れども夫婦の愚不肖。他より咎むべきものハ
あらざれバ。さて箇やうの人に於て。信実あるものハ稀なり。因て淫行の謗り
を醸し。離別の端をひらく。元来貞節をよく守り不遜ならざる婦
のごときハまた信の心あり。故に人の信不信を察せんと思ハヾ平生の言
行を見て知るべし。去ハ北お所ふ貧しく善ハ夫婦あり。常のさゐ

婦は夫をうやまひ。夫また婦を憐みて仮初にもさからひせず。睦まじく暮し
けるが。去年十月二日の夜大地震にあふて大小孩き二人の子供は外の方へ立
出らしが。その近隣より火発つてその家にも火炎覆ひかゝりけるにぞ。
夫より貧しき身の上なれば。せめて着換を入れおきし葛籠ぐるみ持出さ
んと崩れし家に潜りてうち入奪ひて脊負葛籠を曳出しけるが。
まだ火はかゝらず今少し雑具をも持出さんと葛籠をば妻に脊負して
立入るを。この時まで梁の物に支へられてありけるが。のふゑくりけん
棟を男の上に落しと堕ちて嗟といひて倒ると見えしが。急所を打しや。その後
息は絶にける。妻は大小孩き憂へ立よりて引起すに更に正気あらざ
まだ大音あげて救ひ呼び活まとどその甲斐なし。右左なる間に火
は近づきて。はやその家に移らんとす妻ははかなく歎息し。然るにも





節婦衣を捐て良人の死骸を収む

この死骸を火に燔までハ丈の恥なり。今一個人のあらバ擾ひてこの場をまぬかれんと思ひを見まどこの擾ぎに紛を怨まんやうもなし。さればとてその婦ハ脊負し葛籠を手早く下し。蓋をあけて中なる衣類残りなく掻出し扨夫の死骸を引起し力を極め抱きあげてかの葛籠の中におしいれ。蓋をなし錠を鎖てまた脊に負けるが。始め来しハ似ざりしと重くて他に物を持べきやうなし。残り惜しとハ思へども。その衣どもを捨おきて。まづ火ハ脱まじと思ひけれど今宵の騒ぎ何方とて穏なる方もあらず。任意親族知音の方へゆかんとも常のごとく野辺送りのあるべきならねバ。浅草観音の裏手にハ縁で知る寺もあり。まづ彼処へ負ゆかんと心細くも一個浅草川の端に出丈より漸々と吾妻橋を打越んとせしときに歳二十四五なる男跡に

なり先になりて来りて色が妻をうけ。女の身にそ大きなるぞ。面皺を寄
貪て若しくは己は山手の老なるが、この所に親族ありて今安否を訪て
帰る己の方は枕席も緩く、家の崩るるまでもなかりけれ。かく遠方へ出来
しなり。さればこそ未だ歳不足の人なれど難義をみるは忍びねべきことは面
貌を背て進ぜんかん、身先に立て様子の案内をせよといひ。女は見
を顧りみるに、その詞こそ優しけれど、骨逞しく面魂一癖ありて心は推
し。そのお志は嬉しけれども、この面構は身に換ざる大事の物の入れ
べ、所詮人はまかせぐし。といひ捨て行くとせ。彼男は猛足で早め吾で
怪しき者と推して物のでく拒むなり。是非らべこの界こそまるまでうぶ
身はいはば大切のものなるが、あん身が方へ質としずし。心で安んじてその面皺
をつまされ負せんべし。かくいへば箇様のことは不聊なりとも善根をなさん

とおり心あるを深く聴きとりて。強ても主を脊負んといふにぞ。女も今ハ
肩の骨砕るばかりなるにひけれバ。然までハ憐もとのよふす。その四綱ハ往
しバ。妾時妾が労をも休めん。憑に来らバとおもひけりて。首鎖を手足処へ下
けれバ。彼男ハ立よりて。ひとし摩くしてまでを脊負ひ。おもひの外ハ貴目あり。
女の身にてハ苦しかりけん。去来ですこよりハ何方までも送り得させんといひ
ひあぐく携ぐる葛籠を綱のごとく女にもたせバ受とるハ中ハ赤からねど夜すがら。
一ッがゝりの嵩るなれども。さながら重く覚ゆるにぞ。這ハ錢などの入たるやり
失らひてハ義理も済ねとその結びめに腕さしいれ小眼ハ眼と擦込んぞ。
道を歩く事二三町田原町を過し頃。かの男ハ前に立しが。物もいはず振
むきて女を蹴と突倒せバ。さハ何をなしのぞといひつゝ手を処へ倒るれバ。男ハ
よれ懸かりて葛籠を奪んとせて女もそれとしと心著き力を究めて葛籠

を押へ。賊よ〳〵と喚りければ。遠近にありし人々これを聞て馳来るまぞ。彼
男ハ急で放し。葛籠をバ脊負しまゝ夜の暗きに紛れ逃失る。其下にハ
人集會て。まづかの女を引起し。賊ハ何ぞと尋まし。と問まして渾身の塵
うち拂ひ在し次第を見れバかくなりぞ。その攄りにとて其男より曩
これを預りくらま。まづこの中を見て給べとの人々。集まり披きみるに藍
縞の小袖一ツ。そを卷ける紙包の重やかなるを取出し。みれバ二朱金にて
三十両あり。女ハ見て大に呆れ。いかにてかの大金を妾に預けしかの
ものと更に其故を解さバ。集會る人々も。こともに顔を傾けて不
婦人の死骸をいるる葛籠なりしと知るより。かくおんなを騙して奪
ひし彼ハ正しく盗賊なるべし。この曩にもその始め。混雑の中へ入りて
盗ことせしものならん。されバ箇斗り大金の入てあるべしとも知らで奪ひ去


節婦賊にあふて
還て多くの
黄金を
得体



らずその葛籠の重げなる定めてよき物の在んとおもひその親ひを遁
んなれこの罪こそまさしなるべし。いかに純き盗人といへども只かの葛
籠を出べ。おん身は夫の死骸ありしとぞ。後に開きて見てさぞ溝へ捨るなど
へうち込ば。おん身が其日の夜を捨て持出しちり赤心も水の泡となる
がらくそき。亦この罪にかくおもへり。大金のあるなれば。ことにまた尤
なるまじ。このまゝにて捨おきましばまづ此よしを訟へて公裁に任せ給
ん。と衆議一決してその議で。その筋へ訟へけりしとぞ。かくて盗人いかめ
葛籠を負ひ。こゝで逃去りてより後いかなれ微しけん。事実は知られ
ど。熊谷川岸の辻待にそのまゝ捨ておきけるが。葛籠は町役且持
ちの輩さへ死してありけれバ。夫でその所の者尋ね来りてかの妻が住
方を探しつゝしけり。妻は夫の死骸を得て。歎ぶこと大かたならぬ頓

て菩提院へ葬りて懇懃に弔ひけり。かくて彼盗人の遺金は全く此女が赤心により。神の授けなりしならんと。下し置るべきと歓びはよく仏事を務しとなん

○

こゝに江都浅草橋のほとりに。貧しく暮す鰥夫あり。是まではゞ然るべき商人の家に務めいと律儀なる者なりしが。主人も二なきものに思ひ做せしが栄枯得喪は常のならひ。その主家年々微禄して。遂に召仕ひの小厮をさへ去らせしに。この男も年来の奉公も空しくなり既に暇になりければ。泣々その家を立出て親の方へ帰りけれど。親はこの時七十余にて元来まづしく活業なく。主家に務め在りし時より己が給金は遺りなく。こゝなるこの老たる父母に送り遣ひけるなれども今

かく流浪の身となりて。泉州のかたほとりなる家に在りし日覚えたる菓子を製して僅なる利を繋ぎ暮し。知音の方に持来て價を卑く鬻ぎて聊の糧を得てその日〳〵を営みけるが。その父母は老衰して人の多く出入るを嫌ひ。日頃右に左にいふなれどこの男もこの事を心憂く思ひて別にさゝやかなる家を借り一人住して菓子を製し売ありきて父母には不自由なきやうに心を着けその妻と相計りて。老父母を養ひける。然るにこの夜地震にて近辺多く家潰れ老若男女圧死しぬと聞くにかの人を驚恐心にて空に惑ひ出て。かの父母が居所へゆくにこの辺すべて大に潰れ足を入るべきやうもなし。偖こそ父母は年老て足もとも弱ければ定めて梁の下に埋れしけん。と胸躍り泣悲しとこそ崩れし家を搔除け〳〵乗越え漸くにして寝所へ到るに案のごとく柱摧け棟落て檐

は地にあり。傍へと心も心ならば膂力に任し木をとり除け。家の裡を
のぞきつゝ妻をあげて呼立れども。さらに答る妻もなく又人ありと
しもみえざれバ。かくてハ逸早くこの所を逃出しのがるゝと暫時彷徨
ありける所へ。火の廻りとて弓張の挑灯を照しつゝ。二三人来る者あり
かの男ハ妻かけて。その家に住し老丈婦何方へか立退し。おん身等
知りておハするやと問へバ火の廻りの男答へて。偖にそれ老丈婦とい
ふなれど。先老丈婦の手を出しを長屋なる甲乙が。手を携えて続と自に
両国橋の方へ逃去り。されバ大かた怪我ハあらど波奴を索ぬめへと
いふ。彼男ハ此由をきゝて傍ハ助かりのかしーかと掌を合せ天をむかひ。妻
ける。急ぎて立戻り。それより両国橋の辺にゆき。其処此処とたづぬ
るに。広小路と唱ふる所に。つゞかくてありけれバ男ハ見ゆるより程近


孝子父母を護りて資財を忘る



づき。㛃父母よ。無事にて居給ひしこそ嬉しけれ。と涙を流し歓びぬ。知れる人の許にゆき。戸一枚と菰を借りうけ。これを敷きて父母を載せ。まづ是にて安堵せり。とかの伴ひ出たる人をも。懇ろに恩を謝し。ある侍りしを去やらば。半時ばかり在りけるが。精に疲れけて肌寒さに心着きて老父母のさぞかし寒く在まさんとそれより再び父母が住居し家に到り辛じて漸く襖一ツを見出し肩にかけて出るを見。その弟に出会て。如此々々のよしを告ぐ。その弟は兄よりも。その住居遠ければ。遅くありけるよしを詫ぶる。さて諸共に廣小路なる。父母の許に往き。まづその無事を祝しけるが。この弟は縁てより家別まして妻子あり。孫にその所も地震つよく家居は悉く崩れまさで無事なるをとり所ゟて道路に呻吟ありしと聞。父母の二方は嫁と孫の身の

上にハ案じ玉ふ。你ハ頓にさて稚きものゝ身のうへを計らへよ。吾ハとにかく
あつて。孫ハ兄の傳副あれバ、いさゝか心おくことなし。と兄も共に勤る
ふぞさらハとて身ハ去て去りし兄ハ終夜父母の傍らを漫つて離れざる
なり。程ありて其の夜も明はなれけれバ、一統の衆もまじへて旅て始め
て心づき僅ばかりの鐵ありしが、この騒動に心志を懐へ納めもやらバ遊
出て後ハ我が家を顧るいとまもあらバこそ。父母の傍らを離れしど。と一向に
念じらりし。今より八夜の間に戻りて、かの鐵を身をもつて来たるを絶さむと
ましてけり。今ハ不今ハ失ひたらんかし。人他に隠れまし。まづ立戻りて有無
を知らんと、このよしを父母に告、立戻りて我が家を見るに、この邊ハ火災もあ
らで、孫に養ひ給ふ縁家とて、かえて擔端いきつら傾きたるのこと家の崩まし
ふあらざれバ、立入りて左右を見るに宵に出し時のまゝにて、何一つ失せ

しけるのみ。男ハ大ひに歓びて残ハ懐にし僅なり残りたる飯及び製し
きしたる菓子までも籠に入れて持ひ帰き。父母にも進め自身も食ひ。
且父母の近隣なる甲乙にも恵ミ与へて。一時の飢を凌がせけるこれ実なる
孝貌にあらん。親なるものの志し。継ぐもかくあるべきなれど。天災不時
の難あるしと見。まづ手に後来を図るよりハ金銀貯蓄を先にして父母を
後にするものあり。此の男と懸隔ハ
因ふりし天正の頃何某といへる士人あり。書を重く登庸せられて書頭を
務む。然るに性来金銀を好き是を貯ふるを心にかけ。折くその
黄金を出し。書院に並べて多寡を試み。次第に殖るを楽とはなる
と見え此の士人例のごとく。貯ふる黄金を出し。広き書院に布満て一人
満面に笑を含と限りなき楽ミとして。是を眺やありけるをり

かゝる人来つて今組下なる雑役初の喧嘩より既に刃傷に及ばんとせし頃来つて鎮めしと急ぎ告るものありけり。その人聞て赴き騒ぎ黄金を納むるに賄なりけれバ。その場にて詫免しが。その事彼是纏まりありて鎮めぐらしくその夜を明し。翌日の日中過る比やうやく縁の果しかバ。それより家に帰りしが。常に不動なりけるまる黄金。生得書院へ出せしまゝり。不慮に騒ぎの始まりて以上一昼夜手扱出で家に帰り来されども。更にその黄金を念とせざりしとに於て平生より。士人にして金銀を貪るを好むへしと陋しと識るものも多かりしが。遁間のことにおいて識ありしもののことはを弁ふかくてこそ士人の志気なれと人これを感じぬといへり。その事は更なれども。その親へ本文には菓子屋の男に似たり

○數者未然を識るの條

俗に傳へていふ古へ未来の吉凶を知りて且天變地妖を知る事を
神人と称するとぞ所謂吾朝安部晴明。或は大徳などの類ひ
をいふ。元の唐山明の時湛然禄命して人の吉凶悔吝を知る術あり。
或は鄰道人といへるもの。人の肌付の衣を看て。その人の事を指に。
ことみな中らざる所なし是等へいづれある法術か世に傳れば知るもの
あし。但今の世に未然を識るは名儒と称する人千に二三中はあらじ
ありても易学は未然のことを知る術なりといへども学ぶ所精しからず
ぞ俗情胸中に先入るものゝ事を是と察にへざる不系師のいづまの衛ふる。四
方都といへる盲法師あり。誰人かる習ひけん。人にあつて其聲を聴ば。
直にその人の吉凶を識る。但この法師が天性にて他に傳へざる人ある

究竟るにこの人年々に此術の精しくなりて。人の為に益ありしが己は宿志を悔ミ。よしなき事を覚え得て人に逢ごとにその人の吉凶禍福胸にうかび在流左きと限りなし。忘まんとおもへど忘られで生涯の苦労なりしと歎息しつゝいひけるとぞ。去ぬる文政十三庚寅秋七月二日にて。今を去ること二十七年。その日申の時ばかりに京師大に地震なして洛中の土蔵築地など崩るゝ所も多く家居大かた潰れ損じ。怪我せし人も少なからず。人々大に恐れをなし。家を遁り出て大道に莚物を敷つゝ私に仮の宿りを補理てゐて居ること二三日。あるひは大寺の境内にうつり。その揺返しを避ふける程るに二日四日過ても。なほその名残ありて小さき震ひ時々あり猶折々は昼夜二十度ばかり。後は遂に間遠くなり。七八度より四五度におよぶ。されど

より廿日ばかりをへても。猶ゆり止ことありければ。人々まどひ恐れたりき。
既にいふ地震ハ江戸も甚く大風ハ甲府などつよく雷ハ京都など甚しと見え。
是をもて論とするときハ。江戸などの大震ハ多兒と察しぬれどもあれ
婦女子小児のまどひハいふにもあらんと頻ふまで舊記を挙てその理を。
四方に示んとその頃の碩儒濤山先生が著しゝる地震考といふ書
にのせたる。この説を以てこれをいへば。江戸も大震ありて二三日がほどハ昼夜に二
十度も揺しといへるが。去年十月に江都の地震ハその夜大小千度ば
かり。翌二日昼夜に五度。四日に二度。五日八度。六日三度。十日二度。十一日
二度。十二日一度。十三十四の両日二度づゝ。十五日も又三度。十六日に度十七
日三度。十八日夜一度。この時少しく雷雨あり。十九日二度。廿日一度。廿一日二
度。廿二日一度。廿四廿五の両日一度づゝ。廿六日二度。廿七日一度。廿八廿九両日一度づゝ。

二の月總計八十度のうち昼二十八度夜五十二度その餘ハ記すれバ遑あらず。夫より稍遠くなるといへど年を經て同五月までも折々微動在けるハ粗その波殘あらん。三才圖會にもある微動累月止ずと記したり。先年京都より或人の許に送り越したる書状とて其人の見せたりしハ。その前文化九年冬十一月四日まで江都に烈しき地震あり然れども家崩るゝに及ばず所々の土蔵少しいたみ壁の落たるまでなりしが近来つよき地震あるごとに震ひの目的とて縦横その地震を圓經五分とし京都始めて震ひしを圓經二寸ばかりの圖に用て文化度の地震より六倍と知られたり。以下その目的に慣ひて或ひハ圓經一分二分。または七八分のものもあり日時をさへ委しく記しその時その地に在ざるも當るまでの書状あり。是をもて見るに今度の地震京都より八度數も寡く且

揺も甚しかれバ。さりけれど枕震考ふものゝ多くて今ハ懼まで大路に
臥もの少なかれバ周で日本橋へ何人か。そや大震の来る理なけれバ。
安堵して家に入れど。然かく後々夜々気に犯され病に罹らんと人をも
教し。國字を附て巷の衆にも見え安きやうに是を諭せり。余も往かゝりて
是を見て其人の至誠を感じ。さて文政の度京都の枕震にかの巳方都
との盲法師朝起て物の音を聴大に誤りて僕を喚び。今日は大に
調子狂ひてかならず災ひのあらん日より早く朝飯をまゐらせて。嵯峨
の方へ伴ひ給ひけれとの人僕も縁で主人が風察。心得るまでもなく急ぎ
主人に朝飯を進め。その身も倶に食ひ果まひて頓て手を携へ
を急ぎて嵯峨の奥へ趣りしに。巳方都躬も安堵せずのまゝ此処に
ても調子くるへりきゝがたき手に悲るに在りバ。愛宕の傍何楽ハ来

来の知己あるに係も知る所あり。急ぎ彼処へ伴ふべしとの僕宰を得て
書宿は知れり。かの僧の行は如くは。僧へ見て謝し侍るは、何事ありて早参に
来りましやと問ければ。四方教養へて言けるは、よしや今日は調子笙しかる
ば名字中務卿せんとて遊ばしゝも途なる者を入ふのべき事なから
ねば。まづ我の三子部を出て浅藏の方に至れども探調子の流ざる由を
この所まで来りしと大息吻てのひければ。僧も為てこの智者が術を
知らざればちゝ猿[?]。まづ足下が心安くは何の変と察しゝる。畢すは昔言
とのひけるは。四方教峰[?]で我もまことに見まさしまれば、知りがてし十に七八は只
哭あらん。と寒暄ありてまことに考へ。まづ此処にても調子するのて全く安
講ひし雅し。今少しすゝむる所へ参りてしと云ければ。僧は峻で呼ひり
も寄ること思ひは護摩堂なり。彼処へ見えてみよとの。四方教悦びまくる

手をひかれて。その堂へ至りみれば。また調子全く浅くなり。暫く有て居りしを
うけて。忽ち治まつてあへて。安堵して居たりしが。その日申の刻過る比
暴に大地震動して。かの護摩堂へ撲に潰て。四方数千樸にて。不死は此
法師此術を覚えて。人の吉凶悔吝を知り。その外所十にして。八九は必
外ることなし。然るに己が死場に至り。これを知らざるのことに遇
て調子悪しくして。安堵しける人謬しらずや。或人これを評して云く
これ至極の理なり。吉の極まる所は凶にて。凶の極まる所は吉なり。喩
へば陰極まつて陽を生ずるごとくなり。既に必死の場に及んで凶却で
吉に変ず。或ひは九死一生の病人を卜するに。乾為天及び地天泰な
どの吉卦を得るとき。知らぬ人は。これを吉とし歓べども。これ大なる凶卦
なり。その人命活がたし。是彼吉極まりて凶に変ずる所なり。これ知るべし。是処に

いつて平くなる事更に絶ることなしとぞ

○地下より火気を発するの條

遠田地震のとき地下より火気を発し。余が友下谷池の端に居ます。彼辺地震よといふほどに。窓き外のかたへ走ち出るに妻子の方に妻りて大に光りを発す。但電のめくあらば。その幅何十丈とも量りがたきが一面に火気たちて須臾更に消る。されど地中の火気発してくる光りあらんといふ。他所にて光りの眼に遮りしといふ人あまたあれど。まゝは樹木などを焼るをもてば明らかに見えず。殊にかの大震にて怨懼のあまりは大かたその光りを知らぬなるべし。池の端の西北隅にして遠くに東叡山の森あるのを周りてその光りを帯るにある。此家下原穢にして泉川澄にありし人の猪に江都のうちにある竈

のぞく二百箇所ありけれど尋常の稲妻なりと思ひ做してありしが後に聞けば地震ありしかの電のみえけるは地中の火気発しけるなり。是をもて見るときは世俗にいふ霹靂と同理なりとの事を経べしと猶詳に思ふに陽気陰に迫められしも擲破りて発するときは震ひ動くこと理の常なり。たとへば人の瘧を病に表に陰気満て是が為に悪寒なる理に熱を含みて既に発せんとすれども表の陰気に閉られて発する事を得ず。ここに籠て身体を震ふこと稍久しくして熱発するときは震ひ止むこと世界にありて地震の理と同じ事なり

按ずるに鑞にて地震の象を作ること和漢三才図会に載たり。まづ二三斗を容べき桶に赤砂を盛り水を投じ底の傍に喉口をつけて投じる水を出し縦ば流るゝの器のごとし人息をその喉

口に吹入るれば數人相交りて十分に吹つゞけ急にその樋口を塞ぐ。則
氣息の陽陰に迫りて出んと欲して桶獨り震ひ動く。その陽盡れば
しばらく震止むなり。小兒戯れとする所以にて。その理をしるべき
といえり。この法いまだ試ざれども。寺嶋良安が説きし所。これ
は極めて試せしなるべし

さて地震後十月二十日を經て。晝夜四方に光りて發す。燃べき遠き電の
如し。この事その頃人に語るに。これをみる者多し。因て思ふに地中の陽
氣脱れ大に發せしといえども。いまだ盡く出竭さず。その餘殘晝夜ともに。
漸くに發する氣を。晝は太陽の光りに見えず。夜のみこれをみるなり。
高き岳に登りて見るに。その光り何處と定まらず。今その身の居
は土地より自然氣發するならんと。さる處にある人の知らざる

のミ

○神明萬民を憐ミ給ふの條

その頃誰いふとなく。専ら風説せしハ。かの大震にあひて。渾身傷損もなく。况て命を損ざる者ハ。ひとへに神明の加護によるところ。因て其人の襟をみるに。白き毛長一二寸なるものあり。これ伊勢　皇太神宮の其人の許ありて。かの毛ありしものゝ災害を免るといひあへり。いふも當下差用の衣服の襟より。白毛を見出しものゝ多くありて。よくこの妄なびごといひ継ぎ語りつぎて。世上こぞりて知らざるものなし。然れども億兆の人民盡く然るにあらざれバ。まことに不測なり。元来我　邦を神国なり。貴賤上下の人たるもの。神明の擁護によりて栄えざるものはなの毛も　皇太神宮より授けのよし白馬の毛なりといへ。余が知己某なる

老人ハ。深く信ずるてありて。このことで疑ハぞ。家内および近隣ハ。男女の老若を探らするに多くこの毛出ぬけり。長さ凡そ一寸五六分。白くして艶ありとぞ。夫神明の出給ひし瑞兆をもて識るべからバ。遥く高き神代より。中古近世に及ぶまで。さまざまの奇しき事あり。粗正史にも載ところならべ渉して疑ひ誣ふからバ

按るに天保年中の事や。伊勢出雲参りとて流行。諸国の人民老少をいはず。伊勢の　宗廟に詣ること。幾千萬といふを知らず。同じ道路参詣の輩へ。その疲労で杖んとして武家より馬篭を出して之を乗せ。銭菓を出して慈に合せて草鞋を施し。酒飯を施こそ。この故に一銭の。路銀を携へずして来る者も。行路飢の難あらバ。数百里の往返不障を聞バ。国で少人女子といへども。欺き犯さるることも更にあらし。実

ふ神明の冥慮ハあらはへ形のごとくハ及ばんや。但往古よりこのる数度ありて。大抵六十年にして一度行ハるといへども。まゝ不測ありて早疏ハ天保度の御蔭参りの節。何方ともなく太神宮の太麻空中より降り来り。一郷ふ墮る者下その家中のもの一人参宮を企て心ともなく出るときハ。是を吹傳へて日ごとに増るより。終ふ一郡に及び一国ハ及ばずまで武人伊勢の山田に群りしが。かの太麻数箇ともなく降て。町武の屋上に墮る。人〳〵不測ふおもひ。伊勢の神慮ふ周ふれ。かの家々ハおへて与ふる太麻一箇もなしと答へ。実ハ神慮の不可思議を識るとぞ。まのあたり中国畿内ふ多く降りてその所より誰ともなく参詣を始め。東国西国北陸山陰山陽の国々。挙つて参宮なしけりとぞ。遠い近き世のことにて。誰〳〵もよく知

なり。箇程の奇瑞は大日本。三千七百餘坐の神社に。伊勢より外
あることなし。然に這回の天災に由。この神の護ありて更に所謂多
きことなるべし
或人強て議論を立て。このことを論ていはく。そもそも 神宮崇敬を
懈まざるもの天災を免かれしめば。汲々たる者なるべきに。或ひは燔死
或ひは壓死のもの負少からざるは。 神明人によりて贔屓ある
ものに似たり。違ひ例の奇を好む族が。いひ出る虚言ならんか
のごいそも亦如何にて。我に毛のありやといふ人違ひ名に天保壬
申諸国凶作なりし年。東都に毛を雨せしことあり。今猶その毛を
蔵する人あり。その頃世名の風説に或人獣の毛を晒せしに。大風
来りてこれを捲き。普く雨せしなりなど。様々にいひあへりしが。全く

左相の為にやあらん。天地不正の気によって斯のごときことあるなり。既に唐土にもこの例あり。唐の咸通八年七月下邳に沸湯を雨らして鳥雀を殺し。宋の端平三年七月血を雨せしこともあり。元の至元二十四年土を雨らすこと七昼夜。その深きこと七八尺牛畜盡く没死せり。その外肉を雨し穀を雨らし。舊史に詳く見ゆる処何ぞ毛とても雨ざらんや。元より怪しむに足らぬのみ。その降る毛遐近に人の拾ひ入るなりとて事にもあげに議論せり。むかし和漢の古例を引き。そのよ所謂論めきて妙く人是を信服すれども事を見ざりき。されば夫深度毛を雨する或人西域の書に攷へまた顕微鏡をもて是を熟視し。是毛にあらざることを知り。その辯を一紙に上木し知己の人に贈りしことあり。余も一枚を得たりしが。今遺失して附近にみし周て睹

紀のまゝで挙ぐ。昨時候不順にて。夏月天に陰雲掩ひ。数日を経て日光を見ず。因て不時の冷気行はれ。稲穀登らずこれは至れ。この時陰雲の中に虫を生ず。その貌毛のごとし。その長さ寸余より二三尺に及べるものあり。然るに風のために吹き。地上へ墜る時草木の精液を吸ひ。これによりて稲粱以下。菜蔬の類ひまで熟せず。国土飢饉に及ぶなり。西域の地に此事ありて。この虫をゴスサメルといふ。遠国陰し毛といへば則このゴスサメルあり。顕微鏡にて是を見るに。脊に七八の黒点あり。たとへば蝉のごとしとおぼしき所もあり。全くの毛にあらず。蓋全体の色定まらず。多くは黄に黒を帯て。斑文のごとき在まず。微少にしてその形知りがたしといへども。遠国人の被に在しこれ大に異なり。後の識者の考へを俟つ

○鼠土中より多く生ずる條

安政二乙卯四月初旬。石見一番地より鼠を生じ其の数幾千万と云ふを知らず。農民の稼穀をそこなふものを聚めて。二十五万七千余。あまりといへどもその鼠減じたりと云ふを見ず。畠に入て麦を食ひ大豆小豆の蔓を喰ひ荒し。然るに翌五月に至り。何方ともなく数千の鼬来つて此の鼠を逐ふ故に大半を滅ぜしと云ふ。但し此の鼬何れより来るといふを知る者なし。土人のいはく海中より。忽然として出たりとなん。かゝる奇談も世に稀なり。土人のいはく去年甲寅。国中に竹実を生ずる事許多。農家五石余石を得て食用となしたりしが。其後に此の鼠は竹実の土中に埋れしが化したるなり。其の証には鼠の頭に竹実の殻を頂くものあり。土中を出て動くに従ひ其の殻自から落るとぞ

按るに唐の弘道の初め梁州の倉に大なる鼠あり。長二尺余在りけるが。猫の為に噬まれり。于時数百鼠忽然と来て。かの猫を噬殺す。少選ありて万余鼠を聚む。州人を遣りて大鼠を捕へうち殺しけるが。其余はことく去といふ。この事本文に異なれども鼠の関によりて録す

○蝦蟇巨蛇と闘ふ条

下総国の主人の話に。同七月十六日。下総相馬郡大留の里に一丈四五尺の巨蛇出る。そのとき丈一尺八九寸の。蝦蟇出てこれと闘ふ。互に雌雄を決することなし。人これを地奇なりとして噂伝へ来るもの。幾百といふをしらず。然るに其の夜陰に及びて。猶闘ひて決せず。観る人倦こ果まて家に帰り。夜明て観るにいまだ闘ふ。かくて十八日におよび。子の刻に至りて巨蛇

死せり。蝦蟇ハ行方を知らずとぞ
按るに和漢三才圖會に。蛇を咬ふ蟇あり。文字集畧にいはく。輪ハ蝦蟇なり。大さ饅のごとし。能蛇を食ふといへる此なりしにや。又小輪の長大なる者歟

安政見聞録巻之下終





安政三歲次丙辰初秌發行

服部氏藏梓



